

講演

「森里海をつなぐ木文化社会」



国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長

あん・まぐとじなむらじ

1965年カナダ生まれ。母方の国籍であるアメリカ国籍も保有。プリティッシュ・コロンビア大学東洋学部日本語科卒業。現在、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長。高校・大学時代に日本に留学経験あり。著書に、『原日本人挽歌』『日本人って!?Part1・2』『Lost Goodbyes とどかないさよなら』『From Grassy Narrows』（英語版、磯貝浩との共著）などがある。発行人・プロデューサーをつとめた『北の国へ!! NUNAVUT HANDBOOK』は「第3回カナダ・メディア賞」の大賞を受賞、磯貝浩との共著作『カナダの元祖・森人たちは』は「2004年カナダ首相出版賞」を受賞した。2007年、フィールドワークの拠点である宮城県大崎市松山の農村を舞台とした『田園有情』と、対談集『原日本人やーい』を上梓。（すべて清水弘文堂書房）

「森里海をつなぐ木文化社会」

今日は金沢からやってきました。金沢は今、真つ白な世界です。私はカナダ出身なので、真つ白な世界がないと落ち着かないというか、物足りなさを感じるのですが、金沢のここ三日間の吹雪が、寒いのですが、そのなかに暖かさを感じています。今日、電車で金沢から来ましたが、落葉の木が本当に美しく見えました。冬になると寂しいと感じる人もいるでしょうが、私は木の枝が真つ白な雪に包まれる風景を見ると、サイレント・ピューティを感じます。冬の木、何かこう眠っている部分もあれば、芯まで冷えないように暖めている部分もあつたりして、そんな冬の木を非常に尊敬しています。

そういう風景を見ながら、あるトンネルをくぐったら、青空と緑の滋賀県、そして京都府にたどり着いたのです。日本を旅すればするほど、陸の上の面積は私の故郷のカナダと比べたら、

非常に限られた面積かもしれませんが、短期間の旅でまるで万華鏡を回しているような気分になります。ちよつと行くだけで、地形が変わつたり、気候が変わつたり、その中の人の営みも変わつたり、本当に日本の風景は多様であると思います。今朝は、二カ国を旅したような気分で作ってきました。

カナダの内陸部で生まれ育つたので、
森と海のつながりが
なかなか理解できなかつた。

先ほど言いましたように、私はカナダ生まれ、カナダ育ちです。カナダの平原地帯で、マニトバ州という湖と森の多いところ
です。真つ平らといえるような平原地帯ですから、北極圏から

吹いてくる風が非常に寒くて、冬になると零下四〇℃、体感温度が零下八〇℃になったりするところです。そういう内陸の平地帯で生まれ育ったので、海と森のつながりに気づくまでは長い時間が掛かりました。十二歳で、生まれて初めてバルディック海という海を見たのですが、海は非常に遠い存在です。海と森のつながりは、本で読んで頭では納得できるような気がしていますが、それを身体で理解するというか、消化することができないまではしばらく時間がかかりました。まあ、日本の中での様々な体験のお陰で気づけたのではないかと思います。そんなことをベースに、最近の活動も含めてお話しをさせていただきます。

ちょうど二十年前に、私は熊本大学に留学していました。留学の最後、幕が下りそうになったところで、先輩のところに相談に行つて「熊本でしかできない体験、何かアイデアはないか」と尋ねると、「それはイグサがいいよ」と言ってくれました。当時、畳のブランドは岡山が有名だったのですが、熊本ではおよそ六割のイグサを生産していました。機械化されていない作業のつだったので、先輩が「そういうのを体験してみると、昔の日本も、多少タイムトラベルしながら、味わえるのではないか」と。

農家を紹介してもらい、ホームステイをさせてもらいました。その時に、オーラル・ヒストリー、口述歴史学に興味を持つようになりました。常民たちの口述歴史学をまとめたいなあと思いました。熊本大学での留学期間が終わったところで、カナダに帰る予定だったのですが、「このままカナダに帰ってしまえば、違う人生を歩むだろう」と思ったので、清水弘文堂書房という零細学術出版社が、当時長野県黒姫というところでDTP編集の実験をしながら農村塾を開いていて、その社主の民俗学の部門に入塾しました。

急激に変化する日本の農村。

明治生まれの職人さんの話を聞いて、記録する。

口述歴史学にどうして興味があったか。当時の私から見れば、日本社会が非常に急激なスピードで変化を促進していた。あくまでも二十代のカナダ人の感覚から来る感想に過ぎないのですが、当時のカナダと日本を比べたときに、カナダはまるで

時が止まっているかのように感じていました。八〇年代、日本とカナダを行ったり来たりしていましたが、日本に二、三カ月いないと、帰ってくるとまた何か変化があったりして、すごくハイになっているかのように常に変化を促進している社会に見えていました。速いスピードで変化を促進するのは悪いといっているのはありません。社会にとつて、どういう速度で大きな変化を促進させた方がいいのかを考えずに、変化のための変化を促進させたりすると、いろんな大事なものを見失ってしまうのではないかと思っていました。変化によつて失うものと得るものを、ディスカッションして、判断した上で進めていくことが健全ではないかと思ったりしていました。まあ、これは二十代の自分がいろいろ考えたりしていたことです。

変化が社会にどういう影響を及ぼしていくのかも含めて、大都会ではなく、農村に行つて明治生まれの職人さんを対象に、彼らのライフヒストリーをまとめながら、日本で、農村で、起こされた、促進させられた、促進した変化によつて農村社会がどのように変わったのか、明治生まれの職人さんの目から見た彼らの声をまとめようと考えました。三年間、黒姫をベースに、い

ろんなライフヒストリーを追つたのです。いろんな人達と出会いました。明治生まれの職人さんたちです。機械化しなかつた農鍛冶屋さん、竹細工師、桶屋さん。彼らの話を聞いていくうちに、今プラスチック製品が多く使われていますが、昔の日本は、本当の木の文化があつたと思えました。私はカナダ生まれで、小学校はスウェーデンで暮らし、ヨーロッパ、西ヨーロッパを回りました。欧米人のベースの一つは、石の文化です。ああいう世界から日本に来たとき、石の文化と木の文化の自然観の違いをものすごく感じました。

明治時代に作られた竹細工、家具、いろいろ集めました。八〇年代の日本は、これらのものは農村でいろいろ買えました。パブル時代は捨てられたりしていました。今、本当に色が深くなくて、魂がどんどん出てくるような感じですよ。こういう一〇〇年スパンのものを作ってきたわけですね、竹から。伐ると死んでしまふと言ふ考え方はあるかもしれないけれど、持てば持つほど味があつて、魂がこうウワツと出てくるような感じがします。

黒姫を拠点に、

いろんな職人さんを訪ねる。

「木の文化」と「火の文化」を知る。

桶屋さんのところでは、作るモノだけではなく、作る道具に興味を持つようになりました。それと、職人さんは木を使って日常品を作っていますが、彼らの話を聞いていくうちに、一本一本の木性格まで語り出したりします。性格というのは人間にしかないと思われる方がいらつしやるかもしれませんが、一本の木が持つキャラクターまで話をしたり、木とそこまで密接に暮らしたり、対話を交わしたり。そういう何百年間にわたる伝承、技術、知恵、その中の自然観も含めて、その中から生まれてくる文化も含めて、暮らしぶり、ライフスタイルが、職人さんがお墓にはいると、一〇〇%とは言わないですが、民俗学の本に記録しておいたもの以外は墓に入っしてしまいます。これでいいのかなと、ちよつと疑問を感じたりしました。

機械化しなかった農鍛冶屋さんのところを尋ねていきます。

彼は鉄を中心にモノを作りますが、それには「ふいご」、空気と

そして炭が必要です。それも木から来るのですね。また、火の管理が製品の勝負所でもあって、ふいごを押したり引つ張ったりしながら八〇〇℃まで温度を上げなければいけないとか。そうすると、木の持つ「力」がものすごく大事になってくるのですね。その時にやつぱり「木の文化」には「火の文化」がつきものだ。 「木の文化」が多少薄れてきた現在日本と言われるけど、同時に「火の文化」が薄ら薄らとなるような現状に至っているように思われるのです。

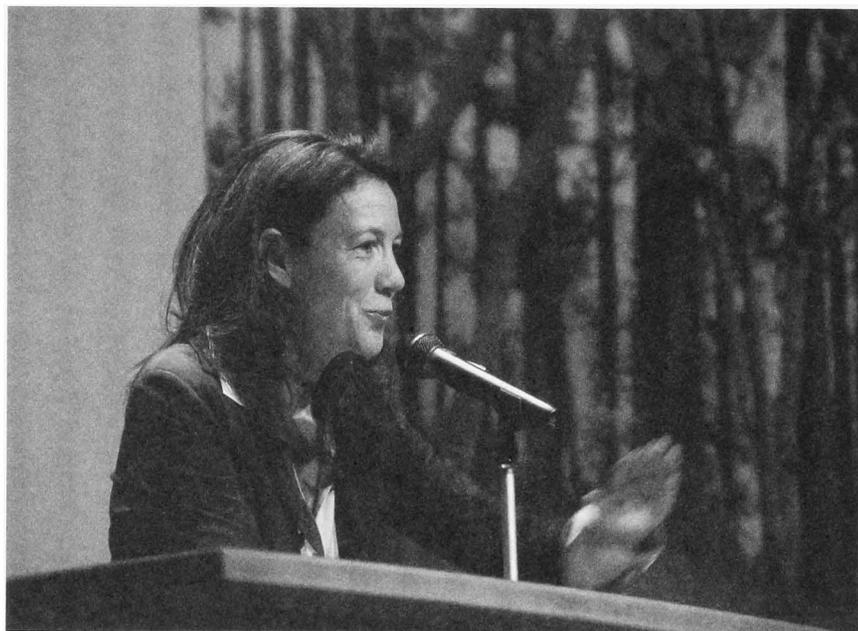
焼き畑現場に行ってみます。そこで、火と木のもう一つの環境を見たりします。焼き畑は、最近評判が悪くなっていますが、実は、火とうまく対話しながら、火と木と人間の対話をうまくしていけば、素晴らしい肥料になっていって、最も環境保全型農業、または森林管理ともつながっていくのではないかと思えます。そういう知識、知恵も消えつつある部分があったりして、不安を感じているときもあります。折角、いい知恵、知識があったにもかかわらず、それが変化の中でなくなっていく。もちろん昔に戻れと言っているのではないのですが、昔の伝統、知識、知恵をいかに生かしながら現代科学技術とフューズして、持続型

農業あるいは林業と結びつくことがより大事じゃないかと思
います。

宮城県の「屋敷林」暮らしで 新たな「木の文化」と出会う。

黒姫では六年間くらい暮らして、日本各地や海外へ行ったり
来たりしていました。ただ、「日本にいればいるほど、日本が見
えなくなる」と思った時期がありました。日本を常に新鮮な
目で見られるためには、海外へ行つて、海外の農村漁村へ行つて、
違う角度から日本を見ることによつて、常に新鮮な目で日本を
見られるのではないかなと思ひ、行ったり来たりした時期があ
りました。二〇〇一年に宮城県の松山町というところに移りま
した。これがまた、別の「木の文化」との出会ひになったのです。
ここは、かつては青葉城の次にくる城下町であつて、大崎平野
に位置しています。真冬は吹雪が吹き、春になると木は柔らか
さを届けてくれます。代掻きをしたあと、大崎平野ではこうい
う風景になります。ひとつの田圃はヘクタールから五ヘクタール

くらい。森はどこにあるのか、実は人の家にあるのですね。ここ
は二〇〇一年の秋から借りて、現在も借りている家で、かつての
家老にあたる人の家です。そこで出会つた木の文化とは「屋敷
林」のことなのです。庭は昔と比べたら小さくつた、四分の一に
なつたと言われていますが、それでも七〇〇坪の庭です。その屋
敷林の家での暮らしは、とくに最初の一年間は全てが目新しい
ですから、いろんなものを観察したりして、一本の紅葉の木
を四千枚の写真に撮つたりしました。毎日何枚も撮つて、紅葉
が一日でこんなに変化するものかなあと思つたりして、非常に優
雅な生活を味わうことができました。昔の人、家老という社会
的地位のある方々は本当に優雅な生活をしていたのだなあと思
いました。屋敷林、木はランドスケープ、美的な機能もあり
ます。もちろんガーデンですから見て美しい、安らぎを与えて
くれる精神的な役割もあれば、ユーティリティ・エリアという役
割もあります。家具を作つたり、三世代後の孫の世代のため、
家建て替えるための木材にしたり、食べるための果実を作る
果樹であつたり。しかしそれだけではなくて、冷房・暖房の機能
もあるのですね。



最初、私はその冷房・暖房の機能もあると言われたときには、半分疑問を感じました。ホントかなと思ったりしましたけど、ある事件が起きて分かりました。その事件とは、ちょうど留守している間に、近所の方が私の竹林を全部伐ってしまったんですね。七〇坪くらいの竹林だったのですが、完全に裸にしてしまった。夏だったのです、真夏に竹を伐ること自体、ちょっと問題だと思うのですけれど。それまで気づかなかった冷房・暖房の機能を、その時に気づいたのです。夏は、陰をつくってくれるし、風通しも良い。冬は、大崎平野はとくにすごい風が吹くのですが、その風を防止してくれるんですね。家を守ってくれる、自分を暖かくしてくれるということが分かりました。

いろいろな木が持つ機能をフルに活用して、利用して、楽しんで、満喫したと、宮城県の屋敷林で暮らして感じていたのです。屋敷林について、この間久しぶりに調べてみようと思ったら、吉川弘文館の簡単な「日本民俗学」を調べてみました。屋敷林のところでは、一九四四年、一九五七年を参考にして書かれたのですが、最後の二行に、「日本では屋敷林の機能はもう消えつつある」と。これはもう五、六十年前に、身近に木と暮らすということ

とが消えていたと感じました。最近、日本中を回っていますと、いまガーデニング・ブームです。でも、私は「屋敷林ルネッサンス」、「屋敷林回帰」もあっていいのではと思っています。最近、里山が見直されたり、復元しようとして注目を浴びているのですが、日本のかつての木の文化を、屋敷林の再評価というものがあってもいいのではないかと思ったりすることもあります。

この写真は松山町で暮らしているおじいちゃんです。彼の表情がすごく好きで、シャッターを押してしまったのです。何をしているかというと、自分の栗畑です。植えたときの話をしています。孫娘とか孫息子を見ているような顔で、自分が植えた木を眺めていて、ホントに美しい顔だなあと思っ、思わず撮ってしまいました。

内陸部から海岸線へ。

「島国」日本を、小さなクルマで旅する。

海を旅し始めるのが、一九九五年あたりです。内陸ばかり回っていて、黒姫には一九八九年の十一月下旬に入って、一九九二

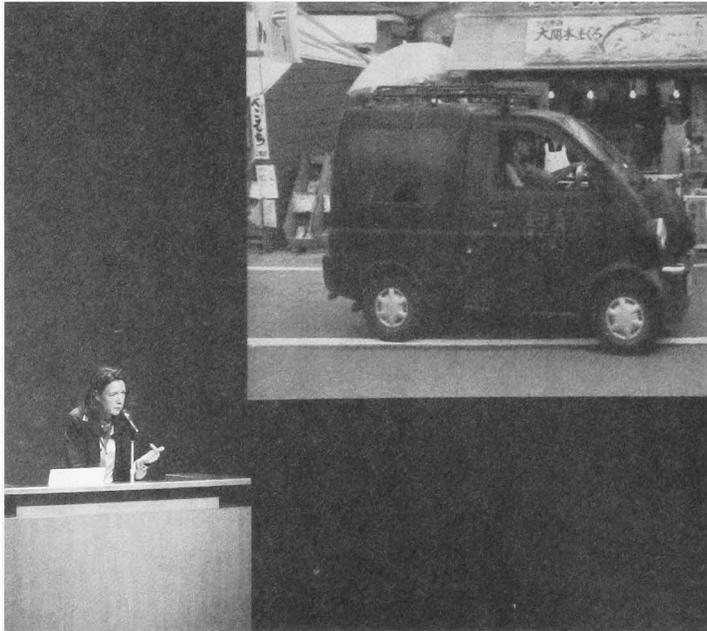
年、職人さんのライフヒストリーをまとめるまで、そこにどうぶり住み着いたのです。そのライフヒストリーが一段落したところで、黒姫と九州の熊本だけで日本社会を見やるのは、ゆがんだ日本論になってしまうと思いました。もう一度日本を、それも北海道から沖縄まで、各都道府県の農村に最低一回は行こうと思っ、四十七都道府県を歩き始めるのです。農村を求めて歩き始めて、一周というか、各都道府県を歩いてみたところで、じゃあ今度は海岸線を行こうと思いました。

最初、農村に入っった大きな理由のひとつは、日本人が外人の私に日本を説明したときに、常に口から出る台詞のひとつが、「日本人は農耕民族だから……」でした。あるいは、「日本は島国だから……」。いつも、その言葉の後に「……」が付いてくる。その「……って何なの」と、いつも思っていました。じゃあ、島国である日本列島を、海岸沿いをブラブラ気ままな旅をしながら回って、「島国ということはどういうことであるのか」、「海と陸の境目で暮らしている海人はどういう自然観を持つのか」、「どういう暮らしをしているのか」、それを見てみたいと思ったわけです。

この写真は、真冬のオホーツク海です。吹雪の中で流水が流れてくる北国、その北海道から沖縄まで行くと、マングローブとかサング礁、亜熱帯林があります。同じ季節なのに、ホントの寒い冬の地から暖かい、トロピカルな南国の世界、これが同じ国に存在しているってことは非常に面白いと思う。説教めいて聞かせるかもしれませんが、日本人は自分たちの持っている宝物についてもうちよつと気づけばと思うときがあるのです。特に、冬の旅をしてみると、日本ほど楽しい旅ができる国はないと思います。真冬の吹雪から、水着で泳げる海まで、ひとつの季節の中でできるということ、海外へ旅しなくてもできるという国はすごいと思います。多様性はものすごくあります。

日本を歩き始めるのです、海岸沿いを。清水弘文堂書房の社主、磯貝浩と。彼は写真を撮りながら、私はメモと運転で。このダイハツ・ミゼットで。二人がクルマに乗って、幅が九〇センチしかないで、まあ、あまりケンカできないスペースでもあるのですが(笑)。二人で、日本全国の海岸沿いを、北海道、本州、四国、九州と、七割ほど二人で回りました。残念なことは、二年前に彼が急死したことです。だから、後は自分でぼちぼちやっていこ

うと。今は、磯貝さんの息子さんとぼちぼちやっていて、八割まで来ました。



海の民は昔から

海と陸のつながりを肌身で感じていた。

こうやって回っていくうちに、面白いことに気がつきました。

回り始めた頃は、常に海の方に目が向いていたのです。海の彼方には何かあるのかとか、いつも外、外にばかり目が向いていました。ところが、七千キロくらい走ったところで、内陸に目が向くようになっていくのです。なぜならば、漁師たちに、「あなたが漁をやっている間に、海がどのように変わったのですか」とか、「変わったとしたら、どこまで変わったのですか」とか尋ねます。そうすると、彼らは汚染についての話や、乱獲、もちろん自分たちの責任もあるのですが、漁法が変わったこと、技術の変化、水質の変化の話をしてくれます。その水質の変化の話には、内陸から流れてくる汚染物の話が必ず出てきます。そうすると、海の環境、健康状態は陸の影響でかなり決まるのではないかなと気がつくわけです。

私は宮城県に住んでいましたので、畠山さんとも会ったり、「森は海の恋人」の活動をしたりしていました。昔は結構、海で

暮らしている漁民、海人は、陸にもよく目を向けていました。

「山を見て、漁場を決める」とか、そういう言葉は各地で耳にします。畠山さんと会う前に、北海道の襟裳岬に行つてすぐ感動した話があります。皆さんよくご存じかと思いますが、有名な実話です。まず、開拓者が入つて、木を生活のために使います。戦争中は兵隊の訓練の場になつたりして、もうキャパシティを超えてしまうんですね。木の伐採が森林破壊までいつてしまつて、禿げ山になつてしまふ。そこで、コンブを採つていた漁婦、女性たちが「どうも最近、コンブの質が悪くなったなあ」と感じ始めるのです、経験で。「ちよつと、いまひとつだね」、「理由は何なの」と。山崩れが増えているのも目にしてた彼女たちは、この海の状態は森林と関連があるのではないかと考え、岬の方で木を植え始めるという話です。

いろんな漁村を歩いてみると、魚付林というのがあります。襟裳岬だけではなく、各地にあるのですが、海の生態系と陸の生態系がつながっているということが、昔の日本人、海岸沿いで海を目の前にして生活していた人達は経験の中から知つたということですね。それはよく、「もつと科学的な裏付けが必

要」と言われているのですが。そのつながりの研究を、いま京都大学が先駆者として、リードしていると私は思います。やはり「昔から学べるもの」を、科学的な裏付けとか確実性がなくても、そういうものにもうちよつと謙虚に目を向けて、そこから学べるもの、生かされるものがあるのか。あるとしたら、どこにあるのかということを探してみる。そういうことが、もつともつとあつてもいいかもしれないと思います。

能登半島に残る「塩田」。
塩を作る人達は、
森の管理もしてきた。

最近の話をさせていただきます。二〇〇八年の四月に石川県の金沢で、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットができました。なぜ作られたか。国連大学は国連のシンクタンクとしてできた大学です。九〇年代に入った時に、グローバルな環境問題、サステイナビリティという傘の下の研究課題は、研究活動も含めて、ローカルからいろいろ研究活動

を進めていくことが非常に大事であるということ、オペレーティング・ユニットという地域密着を目指したユニットを設立し始めました。このいしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットは日本で初めて、アジア初のもので、与えられた研究活動の課題は、里山・里海研究です。金沢大学と二緒にやつたりしているのですが、今年に入ってから、やはり若い研究者の育成も大事だし、里山・里海の中にある様々な物語、その伝承も含めて、伝統的な知恵、知識を探る若い研究者のプロジェクトを作りましようということ、立ち上がったのです。

今年、二〇〇九年のテーマは二つ、炭焼きと塩づくりです。能登半島は、里山・里海を、陸と海のつながりが目で見られることもできる。目で見ることができると、より連環の研究活動が進めやすいと思います。里山・里海、森と海、陸と海のつながる、そのつながりを研究できる場としては、非常に素晴らしい環境だと思えます。

最後の話ですが、能登半島の珠洲市、角花さんという方のところに、揚げ浜式塩田がかるうじて残りました。市のほうでも十四年前に、博物資料館も含めて揚げ浜式塩田で製塩できる

ところを作っています。その塩田で、昔の人達が森と密接に生きていた、森と共にあったのが見えるのです。塩づくりをする人達は、実は、森の管理もします。先ほど、機械化しなかった農鍛冶屋さんの話をしましたが、塩づくりも同じです。ウンと温度を上げる必要のある課程と、柔らかい火が必要な課程、それを使う木によつて変えるわけです。木によつて出る火が違ってくるのですね。塩田に、どういう火が必要であるかを考えた上で、植林活動をしました。森を保全し、森を作っていました。いまだは少なくなりませんが、能登半島で、そういう木の文化、海の文化、火の文化がまだまだ存在しているところがあるのです。しかし、昔には戻れないし、昔のままに全部復元して、未来に残して行こうということは、それは非現実的なことだと思えます。

最近、サーファーたちと話したことを少し。日本の木で作ったサーフィンボードを開発しているそうです。波とボードが対話していかなければサーフィンができないと。そこで、木が持つ質と、海水の質、波の性格も含めて、それらが一緒にならないと、うまくいかないということで、木の文化と波の研究をしている、そういうグループがいます。そこで感じるのは、ライフスタイルの中

で、暮らしの中で、木の文化をもっと取り入れていくことも、復元していくことも大事だと思うのですけれど、家具とか道具とか伝統工芸だけではなくて、遊びも大事だと思うのですね。やはり、遊びから生まれる文化もあると思いますので、機能的なものだけではなく、「木と遊ぶ」ことも、われわれの「木の時代」をつくることだと思えます。

まとまらない話になったと思いますが、これで終わらせていただきます。ありがとうございます。